

今、保育所に求められている事 ——若い世代の子育てニーズ——

川 廷 宗 之
Motoyuki KAWATEI

はじめに

保育指針の改訂や、保母養成要領の改訂など、近年保育所の改革が進みつつある。が、ここで一つ課題なのは、保育所サイドからの様々な検討が行われてはいるが、実際の保育ニーズがどのような背景を持ってあらわれているのかについての考察はあまり論議されていないのではなかろうかということである。

言うまでもない事ではあるが、『保育』は単なる幼児教育ではない。極端な言い方をすれば、幼児期とは様々な意味で『動物から人間になっていく』最も重要な時期であろう。だから、幼児期のこどもの発達支援は、人間になることへの支援である。そして、そのためには、一人一人の子どもを囲む多くの大人達の協力が非常に大切であろう。全てのことを保育所が行うことはできないし、かといって親、なかんずく母親が、全てを取り仕切るのでも無理がある。今日、それを母親一人にやらせようとしたり、全て保育所にやらせようとしたりするから問題が大きくなるのであろう。

そこで、本稿では、現代及びこれからの日本において、保育所の保育機能に何が求められているのかを明らかにするために、特に、子どもの生活の側面のサイドから、なかんずく、現代の子育て世代がもつニーズのサイドから、その背景や、日本の社会全体が子育てについてどのような期待を持つのかについても目配りしながら、若干の考察を試みる事とする。

特に若い世代にとって、21世紀を前に世界・そして日本は大きく動いている。その中に起こる様々な社会の変化、価値の変化を通して、若い子育て世代の人々は本質を求め、豊かさとは何かを問い直し、手応えを探している。保育は必然的に、その様な若い世代の価値意識を前提とせざるを得ないし、保育所はそのニーズに正確に対応する事が求められている。

この考察は、当然のことながら、その様な前提に立ち、中長期的展望に立った現代の保育所の機能や内容のあり方を論ずる所へ発展していくわけであるが、当面は、上記に絞って論考を纏めてみる。

1. 子育てをめぐる地域環境の変化 ——安全な地域集団活動の場の確保——

子どもを囲む社会を考察するにあたり、現代日本の環境が子どもにとってどのようなものな

のか、まず整理しておく事が必要であろう。この観点からは、現代日本の社会は様々な課題を内包している事に注目しておく事が必要である。

特に、かつてのように、大人達の意識の中で、子どもが次世代を担う世代として社会の中でのそれなりの位置を占めなくなったということを、最初に指摘しておくことが必要であろう。なぜこうなったのかについては、後述するが(IV. 1. (1)参照)、そのために、子どもは色々な意味で、大人達の恣意的（営利的・利己的）活動の対象になってしまっていると言う現実がある。それが、子どもの環境を考える出発点であろう。

1. 安全な地域環境の崩壊

地域環境が生物としての人間の限界を超える様な極端な都市化したものであったり、空間的にも時間的にも人間関係的にも極端に過密化していたり、又は、その逆であったり、と言った現代日本の環境の傾向は、人間になるプロセスを歩みつつある、最も可塑性に富み免疫のない子ども達に、最も深刻な影響を与えている。

(1). 生活経験の少ない子ども達

①. 生の自然のない環境に育つ子ども達

その第一の課題は、子ども達のあらゆる意味での生活の実体験が少なくなっていると言う事が上げられよう。彼等の生活環境は多くの意味で、自然の生々しい環境ではなく、人工的に作られた環境である。

例えば、エアコンでの空調の行き届いた環境であり、動物を飼う事を禁じられて他の生物との付き合い方を全く体験しない環境である。

②. 実物情報を受け取れない子ども達

つまり、生活経験が無いと言う事は、様々な実物情報に触れないと言う事であり、実物が必ず持っている、多様な側面をもつ総合体としての実物情報を受け取れないと言う事である。そして、現代は単にその様な多面的な情報を受け取れないと言うだけではなく、非常に限定された、視覚だけから得られる情報が、代替として得られる事により、その実物（『犬』なら『犬』という）情報が得られた事になってしまう、と言う事なのである。

③. 実物情報がないことが持つ意味

この事によって、子ども達の言葉が、現実的な多様な側面をもった総合体としての、実物の裏付けを伴わない傾向について、特に注意が必要であろう。現代っ子の中には、犬や猫といった一昔前であれば当然知っていた動物を、見たこともさわった事もない子が、増えている。詰まり、彼等が『犬』と言う時は、それはテレビ画面で見た、実体を伴わない『犬』なのであって、その感触も温度も匂いもまして、そこはかたない感情の交流や生命の躍動や成

長し老いていく変化等も、全く含まない意味での『犬』という単語なのである。色々な意味で人間の一つの原点ともいえる、『火（直火）』も同様であり、日常生活の中で、焚き火などで暖を取った経験が無いことは勿論、現代の建物の中では、直火を見た事も扱った事もない子どもも、増えてきている。このような言葉の発達の傾向は、その言葉を使って語る内容に大きな影響を与えずにはおかないし、その言語を使って積み重ねる思考にも、多大な影響を与えるのは当然の事である。

(2). 体を使わない生活を送る子ども達

①. 人工的環境に育つ子ども達

又、体を使わない、ボタン操作一つで自分も物も動かせる、自分の肉体の能力を使わない（車とか、エレベーターとか）生活を送る子どもが増えてきた。自家用車の普及で、直ぐ近所でも歩いては行かないで車を使うし、集合住宅化し狭くなり且つ便利になっている家の中では、幼い子どもが走り回ったり飛び跳ねたりする事を許容する状況にはない。このような状況は、その様な弊害の少ないと考えられている農村部でも、多かれ少なかれ同様の傾向があり、かつての様に家の労働にそれなりの役割を持って参加し、体を動かすと言う事は、あらゆる場面で少なくなっている。

②. 肉体の経験と言語能力の関係

この事は、自分の肉体が様々な経験をする事が大変少なくなる事を意味している。その結果として運動能力の発達阻害がよく問題にされている。が、同時に、体験しないために人間が味わう感情に関する言語（認識）の発達にも大きな障害となっている。子どもたちの小競り合いが、命にかかわるまでの限界の無いものになっているのもそうである。

感情言語が自分の実体験に裏付けられていない、テレビやマンガ等から得られる（仮想現実―バーチャルリアリティ―とでも言うべき）言語である。そのため、人間の情動や危険に関する情報のやり取りが上手く行かないのである。

又、自ら行動しない傾向は、前項の体験不足に拍車をかける事にもなっている。

(3). 都市も農村も

このような傾向は、それぞれにおいて多少の頻度の違いはあっても、大勢として都市部も農村部も余り違わない傾向にある。生活経験等の領域では、まだまだ大丈夫だと思われる事によってその事に神経の行き届いていない農村部の子どもの方が、却って生活経験が少ない傾向すらある。その気になれば、周りに自然は沢山あるのだが、・・・。

そして、これらの問題は、精神力、体力、知力の発達において、様々な問題を引き起こしつつあり、その解決の一つの方策は、幼児の生活を、専門的総合的に整え得る保育園の活動の中に求められるのではなかろうか。

2. 地域の子ども集団の崩壊・消滅

——子ども集団の中で、大家族の中で子ども達は何を学んでいたのか——

大人になってから、人間関係がうまくできなく、社会生活困難に陥るケースが少なくない。その原因の一つは、この様な幼児体験のあり方とも関連があると言えよう。大人になって、この様な困難を経験してから、改めて関係の持ち方を学習すれば、一応の問題解決はするが、やはり子ども時代に自然に身につけたものは違うし、なによりも時間の無駄と言うものであろう。

(1). 子ども集団活動経験の少ない子ども達

①. なくなった子どもの地域集団

この観点から、近隣社会に同世代の子どもたちの自然な集団が出来にくい現状の持つ問題点は、多くの研究者によって指摘されている所である。特にその事は、テレビ等を中心とする児童文化とあいまって、塾や御稽古事での子どもの時間的忙しさともあいまって、幼い段階からすこしずつ段階的に習得していくべき人間関係の形成力の、その習得という過程が持てない傾向については、特に注意しなければならない課題であろう。

②. 地域集団がもっていた意義

かつては、意識するかどうかは別として、様々な子ども集団の中での自然な関係や独特の「おきて(掟)」などを習得する過程で、年長の子や年下の子との関係、性別の違いによる関係、力(腕力・知恵・その他の)関係での関係、等々、様々な人間関係を経験し、関係の仕方を習得していったが、それが、現代ではできていない。又、子どもの集団規模が小さくなる事は、人間関係の多様性が幾何級数的に小さくなる事を示している。二人の関係は、関係として2本の線で示せようが、三人になるとこの線は6本になるし、四人になると12本になる。

これらの事は、先に触れた様に、当然人間としての自分の意思や感情の分化を促す体験が少なくなる事を意味しているし、それは当然、人間同志の感情の交流の幅が、感情に対する受信能力も発信能力も、大変小さくなっている事を示している。

(2). 核家族の中で、多様な人間関係を持たない子ども達

①. 核家族の人間関係の少なさ

核家族に育つ現代の子ども達は、近隣の子ども集団活動の経験を持たないだけでなく、色々な大人達との人間関係も、殆どと言って良い程持っていない。時々、祖父母との出会いがあるとしてもそれは一定の時であろう。人間の全体像が見えてしまう近い関係としてあるわけではない。

このあたりの所は、例えば『ちびまるこちゃん（さくら ももこ 作）』のマンガを参照されると判りやすいのであろう。あのマンガに描かれている様な、祖父母との生き活きた関係は、今の子ども達には殆どないのである。

②. 三世代家族にあった多様な人間関係

そして、その事は、何かがあってもそれを家族内でなんとかサポートする体制が無い事を意味する。あの、三世代家族は、夫婦喧嘩をしても、親子喧嘩をしても、祖父母が取りなすとか、子どもが取りなすとか、（不思議と、親世代が取りなすのは出てこないが）それなりの人間関係の広がりの中での安定感を感じる事ができる。

③. 親しいがちょっと距離のある人間関係

祖父母と子ども達の付き合いが、争いにならないのは、両方とも一步距離を置いているからともいえる。直接的に対決するだけでなく、精神的にはとても近い距離にしながら、一步距離を置いた人間関係を体験できることは、様々な人間関係を学ぶ上で、一つの重要な課題であると言える。

一方、あのマンガの中では、ボケかけたおじいちゃんとの付き合いとかという事も、そう言う前提を踏まえて、それなりに学んでいっている姿を見る事ができる。

④. その良さを現代にどう生かすか

勿論、近年になればなる程、急激な社会の発展は、世代間の意識の相違を大きくしているので、その辺から生ずる逆の問題もあるだろう。しかし、人間間の付き合いと言う意味では、そう言う年齢や立場や状況の異なった多くの人との関係こそが、関係の持ち方を育て育ていくのである。それが、今、全くとって無いのは、子ども達にとって、その後の人生を一層難しいものにしていると言えよう。

この様な事を考える時、高齢者と子ども達のこの様な人間関係を、意識的に設定して行く事の大切さが浮かんでくるのであるが、それも、保育園なればこそ可能な事の一つなのではなかろうか。

II. 子育てをめぐる家庭環境の変化 ——求められている家庭支援——

1. 核家族化の意味するもの

(1). 核家族にならざるをえない社会状況

①. 大家族から核家族へ

では、それなのに何故、皆核家族になってしまうのだろうか。それは、現代の産業構造がそれを要求しているからである。

かつての産業は農業を中心とした産業であったため、人々は大家族で暮らし、土地との関

係があつて地域密着型であつた。しかし、この構造は日本では20世紀の中葉に急激に変化し、雇用労働中心の社会に転換した。その結果、雇用が存在する地域でないと生活出来ない現象が発生して、その結果、都市に人が集中する事になる。その時に、家族ごと移転するのではなく、労働力として雇用される事ができた人だけが先ず赴任するという形を取らざるを得ないため、若夫婦のみが都会へと言う構造が出来上がるのである。高齢になったその両親たちは、農業自体がなくなったわけでもないため、又、都市での生活に馴染めないと言う精神的理由で、その動きについていく事が出来ない事が多い。若夫婦の側も都市の狭い住宅条件などの中への受け入れは大変困難でもある。

②. 産業構造に従属する家族

この産業構造に家庭が従属するという傾向は、少なくとも夫婦単位と言うのが、20世紀中葉の進みかたであつたが、これが20世紀末になると、個人単位で動く形になり、単赴任などという形を取る事になって、核家族すら保てないと言う現象が生まれていくのである。

この様に、核家族になっているのは、その家族の意識の問題と言うよりは、産業構造の変化に対応せざるを得ないと言う意味の方が大きいのである。従つて、意識として三世代同居を薦めてみても、産業構造その物が変わらない限り、それは無理なのである。

その様な前提を考える時、それをカバーする社会的な何らかの措置が必要である事がみえてくるのではなからうか。特に、先に述べた様に子どもや高齢者にとって、それはとても大切な事であらう。

(2). 選択の結果としての核家族

一方、この様な社会的変化が生じてから、数十年が過ぎる中で、三世代同居を嫌う高齢者も増えてきている。特に、社会の急激な変化がもたらしている世代間の意識の相違が極端になってきているので、その事に拍車をかけている側面もあるが、同時に見逃せないのが、その事とも相まって高齢者自体が多様な人間関係に耐えられなくなっていると言う事であらう。

かつては、高齢者が最も沢山の人間関係を持ち、その中での然るべき役割を果たしていたのであるが、それは、あくまでもその高齢者のまわりに後から生じてくる色々な人間との付き合いと言う形で、広がっていたと言う事であらう。従つて、現代の様に、(途中から同居と言う様な)自分も含めてお互いに一緒に新たな人間関係を作っていく様な、三世代同居は嫌われるのであらう。

この事から考える事は、高齢者を含んだ人間関係を作っていくには、なるべく自然な展開を心がける必要があると言う事である。あまり意図的形式的な関係作りには、高齢者世代が拒否反応を示すと言う事である。若い世代が高齢者に接近していく時も、保育園へ的高齢者の参加を求めていく時にも、この辺は充分配慮されなければならない事であらう。

(3). 不安定な核家族

この様な背景の中で、核家族にならざるを得ないとしても、その不安定さには十分に配慮を必要とする。離婚の急増や、片親（特に父親）の死亡や大病がその世帯の低所得世帯への転落に直結していたり、母親の失踪等が原因で生活管理能力のない父親のために親子の家庭が崩壊してしまったり、親子の関係が上手くいかなかったり、切れてしまう事例など、そもそも、危なくて親子関係を作れないと言う事まで含めると、不安定を示す結果には事欠かない。

妻であり母である女性の支援については、次項で触れるので、ここでは夫であり父親である男性の支援について若干触れておく事にしよう。

(4). 男性の家族参加・地域参加

①. 家族や地域生活の楽しさを

家族内部の事情はともかくも、先ず状況として男性が家族と共に過ごす時間の少なさが問題であろう。その事は、家族との精神的な繋がりを希薄にしがちである。とすれば、男性を考えた家族支援とは、まず男性が家庭の中でや（会社社会とは異なる）地域社会での役割を回復する事であろう。労働時間の問題があるにせよ、いわゆる会社人間には、会社側だけの都合でそうなっているとは必ずしも言えない側面もある。それは、夫自身の意識もあるが、妻が夫の会社での出世を価値基準にするかしないかと言った、意識の問題も含んでいるであろう。

②. 子育ての楽しみの中で

その意味で、子育ての楽しみが男性を家族に引き戻す要因としては大変大きいのではなかろうか。そして、子どもを切っ掛けとしての地域的な人間関係の広がりも、これは多くの女性に見る様に大変大きいのである。男性の場合も、母親である女性と同じ様に、否応なく子どもを媒介とした地域関係の中に引っ張り出されて行けば、参加していくであろう。現代社会では未だ一般的ではないので、多少腰の引けている状況があるが、頼まれれば出ていくと言うことはあるのではなかろうか。

③. 男性の地域参加への配慮

但し、その場合も、特に男性の場合は、地域の人間関係に慣れていない人を、多少意識的（無理に）に引っ張り出すのであるから、かなり明確な役割を設定して引っ張り出すことが必要となろう。とにかく来てもらえればと言う動員方式では、男性は動かない。なぜなら、参加してもどうして良いか分からないからである。

一般に会社では、その求められる役割が状況を設定する中で、その状況の求めに応じる形で人間関係を作るのが一般的であるから、自由で自発的な人間関係になると、どうしてよいのか分からない人が多いのである。

具体的な役割が示されれば、それをする事には参加を期待できるであろうし、その役割を遂行する中で人間関係が出来ていけば、そこから、それぞれのその人の自発的な活動を期待する事もできるだろう。しかし、最初から来て貰えれば何とかなるという事では、それは望めないし、次回からはいくら呼び掛けても・・・、と言う事になりかねない。

2. 母と子の諸問題

この様に、不安定な核家族の問題や、家族や地域社会と男性の関わりについて触れたが、子育ての問題では、当然母親と子どもの関係が第一義的問題として大きな問題である。以下、この課題について、少し状況を整理しておこう。

特に保育園においては、母親達に対して、『良いお母さん』である事を要求しがちである。(本当は、子どもに良いお母さんであれと言う要求は、子どもと言う大義名分をふりかざしてはいるが、本当は保母に協力的であれと言う要求なのかもしれない。しかし、それは論外であることは言うまでもない。) しかし、様々な個性を持って生きる一人の女性としての人間、全ての人に「良いお母さん」である事を求めるのは妥当なのだろうか。

(1). 作られた『良妻賢母イメージ』の中で、苦しむ母親達。

①. 強い人に都合の良い『良妻賢母』

この事を考える際に、先ず、その前提となっている、いわゆる「良妻賢母」イメージはかなり作られたイメージである側面が大きい事に注目する必要があるだろう。

それは一つには、いわゆる良妻賢母イメージは、実際の生活の中から生まれた考え方ではなく、その時々の方の強い人にとって都合が良いから、普及させた考え方であるからである。そもそも、その考え方は、当初は夫が家庭外に働きにでて、女性が家を守るという生活形態をとる、一部の都市生活者(昔は上級武士階級)の中での考え方であった。20世紀初期までは、日本の母親たちの大多数の人々の生活は、日々の生活と作業に追われていてそれどころではなかったのである。それどころではない位に、その労働は家庭の中で重要な比重を占めていたからこそ、「おしゃもじ権」(主婦権)などが主張しえたのであろう。

②. 都市生活の普及と良妻賢母

もう一つは、20世紀中葉に都市生活者が爆発的に増える事によって、前記の様な、夫が家を出て妻が家を守るという生活形態(雇用労働者世帯としての)の家族が爆発的に増え、その結果、(特に支配者としての男性にとって都合が良く)前記の考え方が、そのような都市社会の生活形態に馴染みやすかったという事が言えよう。

③. 良妻賢母の矛盾

しかし、女性も普通の個性の人間であり、様々な考え方や生き方の女性がいるのは、小説

の中だけではなく現実的問題として、当然の事である。全ての人が良妻賢母でありたいわけではない。まして、近年の様に家事労働の社会化が進んできて、20世紀中葉の時代の様な大変な家庭内労働ではなくなり、その比重が大幅に下がってくると、私だって男たちが楽しそうにやっている仕事なるものをしてみたい、と思うのは当然の事であろう。

一方、良妻はともかく、賢母については、現代の女性達は、全く乳幼児と付き合った経験の無い人が増えてきて、理念としての賢母イメージはあっても実体としての賢母イメージが湧かないと言う風になってきている。

そう言う人々に、良妻賢母であれと要求するわけであるから、要求される本人は、一方でそうかも知れないなあと思い、一方で私だって活躍したいと思い、その矛盾に苦しむ事になる。又、実際に賢母たらしとするのであるが、現実的にそれが出来ない事の矛盾に苦しむのである。

(2). 母子密着がもたらす母と子への障害

①. 障害の発生

その結果、母子の精神的関係に様々な障害を残す事になる。

その障害は、先の矛盾を子どもにぶつけてしまう事や、当然独立をしていく子どもに対し、賢母としてべったりくっつけられていたために、その独立を許容出来ない事から発生する事が多い。

②. 幼児虐待問題の一つの原因

その具体的な現れ方の一つは、自己矛盾の解決をきちんと図れない場合に起きやすい、母親による幼児の虐待問題が上げられよう。自分の心の中の葛藤が、子どもの何かの言動を切っ掛けに、子どもに対して爆発するという形で、虐待と言う結果として現れてしまうのである。多くの場合、本来その仲裁をすべき夫は側にはいないし、そう言う賢母たりえない苦しみを夫は理解しようとしない場合が多い。

祖父母同居の場合は、祖父母が子どもの避難場所になる事によって、子どもは虐待を免れるのだが、多くの核家族にそれはない。子どもの人権を考える立場からは、虐待に対する規制や処罰と言う考え方も提示されようが、日本の現実の中では家庭内の揉め事には官は関わらないと言うのが、通念である。その様な、不介入原則が通念になっている（これも近年の都市生活の傾向ではある）社会では、まして、近所の人々が仲裁に入る事はもっと難しい。ましてや、後述する様に子どもをどうしようが親の勝手という考え方も、まだ色濃く残っている。この様に、子どもの虐待に対する歯止めは、無いに等しい。

賢母は一人でこの自己矛盾に立ち向かうしかないのであり、結局、賢母である事を貫けない（必ずしも否定的な意味ではなく）人も少なくない。

③. 年齢の極端に離れた第三子

しかし、なんとか、その辺を賢母として乗り切る人も勿論多い。が、次の問題は、賢母でありすぎる事によって、ないしは、そうであるしかない人生を生きてしまうことによって、母子分離が出来ないと言う事になりかねない。しかし、子どもは独立をしていこうとする。そこで、母親としては、その寂しさを紛らわすために、未だ若ければ、又、子どもを生むと言う行動をとる事もある。第一子二子と年齢が大きく離れて、第三子がいる場合は、無意識にこの様な母子分離に対する予防である事であろう。

④. キッチンドリinkerの一つの原因

この様な解決の場合は、問題はそれ程深刻化しないが、この様な解決が年齢的に、又はその他の状況によって難しい場合には、その不安をアルコールなどによって紛らわそうとする場合も出てくる。いわゆるキッチンドリinkerとよばれているケースの中には、その様なケースも少なくない。

勿論、その様な妻の事態に対して、夫の関わり方が問題なのだが、そもそも、良妻賢母と言う場合は、夫サイドの事は無視して、女性にだけ良妻賢母を押しつけている事が殆どなのだから、(問題が顕在化する以前での) 夫の関わりは期待すべくもない。

⑤. 何時までも自立できない男の子

この様な母子分離の葛藤は、子どもの側にもある。一般的には様々な人間関係の中で、子どもは其を解決していくのだが、それがないと、葛藤が顕在化し、何時までたっても自立できないと言う問題になる。この傾向は特に、賢母の執着の対象となりやすい男の子に顕著にあらわれる。母親の意見を聞かないと動けないと言う、若い男性の実例は、そう言う男性に飽き足りないと言う若い女性の声とともに、事欠かない。

女の子は、変に期待されない分、賢母の執着の対象にならないので、母親との分離は比較的スムーズである事が多い。(最近、父親の女の子を対象とした父子分離が上手く行かないケースが、見られる様になっては来ている。こう言うケースは、父親が強く、かつ無自覚であるケースが多いため、子ども(若い女性)が、神経症的な問題行動を繰り返すケースが多い)

Ⅲ. 子育てをめぐる女性の意識の変化 ——求められている若い女性達の生き方支援——

現代日本の、若い女性たち、特に子育て世代の人々の、特徴的な傾向は、以上述べてきた様な背景の中で、いわゆる良妻賢母だけである事から脱出して、自分の自己実現(職業上もあるし、家庭生活にもそれを求める)を図る事をまず考えている事であろう。同時に彼女たちの夢は、ふんわりした温かい子育ての夢の実現である。

この二つについて、ある現場の子育て真っ最中の若い母親でもある、保母さんのレポートをふまえて、整理してみよう。

1. 自己実現を求めて

(1). 社会的自己実現

①. 社会的自己実現の基盤

若い世代なかんずく女性達は、明るく新鮮な雰囲気の中で生き方を選択し、自由で個性的な、ライフスタイルを作りあげる傾向にある。それが成り立つ背景としては、先にふれた様に都市の核家族が主流になっている事、就労の意味が（経済的理由ではなく）（社会的）自己実現の為と捉えるようになってきている事、その結果もあり女性の結婚年齢が上がってきている事、自分たちのライフスタイルにあわせて、子どもをどうするかの計画が立てられる様になっている事、等が上げられよう。

②. 「家庭的」自己実現

自己実現は、単に社会的な自己実現に止まらない。ライフスタイルはむしろ、個人の日常生活の中の、その傾向を明確にあらわすのであり、その意味で、家庭（個人）の生活のレベルの中での自己実現の比重は大きい。

その事は、遊びや外食などの生活時間の使い方などから始まって、インテリアデザインや服装等にも、様々な自己実現（表現）が行われている事を示している。本稿での課題の子育てについても、それは同じであり、子どもを、自分のライフスタイルや自己実現の素材としてしまう傾向も見られる。この場合、子どもが自分の思うようにはならない事が分かった時に、矛盾をどう乗り越えるかも、若い世代の一つの課題となりつつあると言えよう。

(2). 自己実現追求の結果として

その様なライフスタイルは一方で以下の様な結果をもたらしているとも言えよう。

自己のライフスタイルを追求しようとすれば、個人で行うのが一番手取り早いのであり、その結果、結婚年齢があがる事になる。同時にその事は、結婚後の子どものことにも当然及び、子どもを持たない夫婦（いわゆるDINKS）がふえたり、第一子の出産年齢が上がったり、少子化が進む事になる。

又、その意味では、結婚生活を継続するかどうかの決断を、自己自身の気持ちで決められる様になり、母子、父子の片親家庭が多く見られるようになる。

しかし、当然の事ではあるが、この様な傾向は、若い世代の意識だけから結成すると言うことではなかろう。この様な意識を持った時、その行動を支える、特に経済的な事を中心とした社会的な様々な条件があると言う事も意味するのであろう。

2. 現実の女性に対する労働力需要

——高齢化社会は女性の社会進出を要求する。——

(1). 社会が求める生産力

その様な『自己の実現』や『子育ての夢』と言う若い世代の意識とともに、若い世代、特に女性に対しても、日本の社会自体が社会の発展のエネルギーとして、良質な労働力生産力であることを求めている。

その理由の一つは、日本の社会全体の高齢化傾向（被扶養人口の増大）や若年人口の減少傾向に対応して、今までは被扶養者でも良かった女性達の労働力が、正規の労働力として必要になって来たと言う事が上げられる。そのために、若い女性についても、（ピーター・タスカの言う「職場の花は、もういない」と言う、）腰掛け的な労働力としてではなく、将来の普通の労働力としての採用養成を考えざるをえなくなってきた。

その事は、当然、女性を一人前の労働力として考えるのであるから、出産即退職という考え方から、継続的な勤務を前提とする良質な人材の確保を求めるようになってきていると言う事であろう。この事は、保育園の役割を考える時、大きな社会的変化である。

(2). 進む労働形態の変化

この様な状況の変化に対応して、男女雇用機会均等法、育児休業制度、フレックスタイム制の導入など、それなりに若い世代の意識に対応した労働条件整備が進み、就労形態が変化してきた。又、サービス産業の増加、ソフト産業の増加で女性の職場が広がり、資格やライセンス取得に挑戦したりして女性もより高い労働力になろうとする傾向が顕著であり、その事は女性の実学的な進学動向にも現れている。

一方、労働形態についても、正規職員、契約職員、派遣職員、パート職員と、労働契約のあり方や勤務時間のあり方などの雇用形態が多様化している。同時に、週休2日制の導入で、土曜、日曜休みが急増し、（これはウィークデイの勤務時間が長くなる傾向として現れ、保育上の課題を生み出しているのだが）その反面、労働力市場の主流であるサービス産業では、土曜、日曜の労働力が求められている。そして、この様な労働力は大・中都市に多く求められるため、子育て家庭の多くを都市に集中させる結果になっている。

(3). 子育て経費の負担増

一方、様々な育児の社会化（外注化）が進む中で、子育て経費の家計費に占める割合が年々大きくなっている事が示している様に、子育てはお金の掛かるものなので、その事により、女性が就労せざるを得ないと考えている傾向も見られる。

この様な社会的な要請は、日本の社会の変化に伴う必然的な事と考えられようが、この要請に若い世代が、特に女性が普通の人間としてそれなりに応えようとするれば、前記の自己の実現を強く目指す事になる。一方に働きながらの育児支援システムが整っていない場合、この事は、ますます若い女性にとっての自己の実現と子育ての夢の矛盾に追い込む結果となっ

ているとも言えよう。

3. 子育ての夢

若い世代は、子育ての楽しさを味わいたいと思っている。しかし、現実と同時に今後の社会への不安や自分自身の将来への展望の不確かさもあって、今の社会環境で子どもを一人前に育て上げるのに不安を抱いている。その不安は、例えば、商品化された脅迫じみた情報過多や、子育てにかかわる歪んだ情報などで、ゆったりとした温かい楽しい子育ての今に没頭できない。

一方、先にも触れた様に、子どもの数が減ったことで、子ども同士の友達がいない。子育てを傍で見ていた体験もない。母親は他人の子育ての姿に触れる機会がなく、そのために、孤独な気苦勞の多い子育てとなりがちである。かつてそれを癒してくれたであろう、祖父母や家族は多くが就労していたり遠く離れているため、又、近所の親しい友人も少なく、結局、子育ての手助けやアドバイスが貰えない。

又、育児経費は増大の一途をたどっているにも関わらず、一方、自分の老後保障資金の問題等もあり、経済的負担に耐えられる自信がないと子どもを産めない状況になってきている。そして、意識の問題として最も大きいのは、様々な情報にふれる中で、将来の社会について建設的な展望にふれる事が非常に少なく、又、自ら社会の展望を描くには力不足であると思いを込んでいる傾向がある。

その結果、現実的には、結局のところ、複数の子ども達を育てようとする親が少なくなり、中には、子育ての夢を断念する若い世代も増えてくる。又、子育てに過度に過敏になるため、ノイローゼ状態になる母親や、母子密着しすぎて母子分離が出来なかったり、過度に無関心になりすぎたりする、といった傾向が顕著にあらわれて来る。

4. 社会的自己の実現と子育ての夢の矛盾と両立。

社会的な生活における自己実現と子育ての夢の自己実現とは、子育てを社会的行為と考えるならば、本来矛盾しないはずである。しかし、現実的には、子育てを私事と考える故に、この二者を矛盾として捉える若い人々が増えている。(この矛盾は、保育園関係者の中でも整理されていない人が多い。)

その矛盾との両立の姿を、近年の社会の変化を保育現場から拾ってみよう。結論から言えば、子どもを産み、育てようとする側からこの自己の実現と子育ての夢とをみたとき、多くの人々が苦しみ、戸惑いを感じているのではないだろうか。

この前提としては、現状の様々な社会生活の中で、特に(社会的)自己実現を求めようと

する人々にとっての子育ての支援システムはまだ不十分であり、かといって、家庭で子育てに専念するには、その支援システムも又不十分であると言う、中途半端な保育や子育て支援システムの現状がある。この結果、現実生活の中では、自己の実現と、子育ての夢との間に矛盾が生じ、この両者を同時に求めることはできないものであり、あたかも相反するものと、捉えてしまうのではないだろうか。

例えば、①子育てという行為が、その個人の喜びにならず、社会から取り残された様な気持ちになったり、②直接的に評価されやすい仕事（職業）を持つことだけが自己の実現であると思ったり、ひいてはそれが、子どもを産む、産まないの選択になったり、③社会参加をあきらめた上での子育てという、どこか被害者的な疎外感を味わいながらの、子育てとなっているのではないだろうか。

人が喜びとすることは何か。それはこの自己の実現と子育ての夢の両方を無理なく計っていくことであろう。自己の実現は子どもを産み、育て、幸せな家庭を築き上げるということである場合もあるが、それは単なる私事ではなく、明確な社会的行為である。一方、もう一つの自己実現は、同時に明確な対価をとる労働という形での社会的分担のシステムに直接参加するということによって満たされるのであろう。これも言うまでもなく、明確な社会的行為である。この両者があいまって、社会の発展のエネルギーになってゆくことは誰しも考えるところである。

そう考えると上に述べた、社会的自己実現と子育ての夢（と言う自己実現）は矛盾したり、相反するものでなく、両方とも社会的行為として（単なる私事と言う理解ではなく）、社会の支援によって、同時に実現しうる事柄としなければならない。そのような役割が保育所に求められているのである。

Ⅳ. 子育てをめぐる家族の意識の変化 ——求められている社会的子育て条件の整備——

若い世代の意識について触れてきたが、ここでその背景となっている、現代日本の育児親の大きな変化を指摘しておく必要があるであろう。それは、かつて、育児は私事であったが、現在は違ってしまっていると言う事である。それは、現代の高齢化社会の進展に伴う社会保障（年金）制度の発展は、子どもの親への経済的扶養義務を事実上（民法上の規定とは異なって）免除してしまったと言うことと、大きく関係している。

1. 義務ではなくなった子育て

(1). かつて義務だった子育て ——子育ては老後保障——

『私物的子育て観』

子育てはかつては、その個人や家にとっての義務であった。なぜならば、子どもを育てる

事は、その両親にとっての老後保障を意味していたからである。つまり、子育てをしなければ、その夫婦の老後の生活を全く保障されないわけで、その意味で、その夫婦自分自身にとっての必要性から、子育てを義務と感じていたのである。「三年子なきは去る」などと言う格言も、この様に考えると、当時の人々の切実な思いが伝わっているのではなかろうか。それは又、同時に、「家」制度の中での「家」の存続を意味していた事はいうまでも無い事である。

従って、子どもは親を経済的にも支える存在として、一種の私物であった。この結果、親が経済的に困窮すれば、子どもを事実上売り飛ばしても、それは責められる事では無いと言う道徳観が、通用する事になった。又、子どもは親の私有物であれば、母子心中なども、同情に値こそすれ、子殺し母と言う受け取られ方はしないわけである。

この様な考え方をここでは『私物的わが子観』と読んで置こう。この考え方は、現在も根強く人々の意識の根底を成している。そして、当然、この考え方は、子育てを私事として全面的に家族の責任と見なす。

(2). 義務ではなくなった子育て ——老後保障としての子育ては不要——

しかし、年金制度の整備は、少なくとも経済的には、若い時に子育てをしようがしまいが、生活費が保障される事を意味している。と言う事は、子育てをするかしないかは、全くその人のライフスタイルの問題と言う事になってくる。子育てをしない事は、現状では経済的にその夫婦の経済には大きなプラスメリットになる現実の中で、これは大変大きな影響力をもっていると言えよう。

もちろん、その結果として、子育ての楽しみを味わえないと言う事はあろう。しかし、それも、単なる私事としての子育てと考えるならば、それはライフスタイルないしその人の価値観の問題と言う事になってしまう。

(3). 世代から世代への責務としての子育て。 ——『社会的子育て観』——

①. 誰が老後をいしわうするのか。

以上の様に考えると、一つの矛盾に気づくであろう。それは、年金原資は誰が出すのかと言うことである。

年金制度は積立て制度だから、自分で積み立てたものを回収するだけだと言う考え方もある。しかし、現実的には年金制度は、積立て方式ではなくって、賦課方式（事実上の税と同じ考え方）になって（政府は折衷型だと言っているが）いる。その時々払って（イメージとしては積み立てる）もらった年金分を、その時々の高齢者の年金として回しているのである。

積立て方式が良いのか、賦課方式が良いのかの議論は別として、現実がそうになっていると

すれば、若い世代がいなければ、今、年金原資の積もりで払ったとしても、(極端に言えば)それは年金として戻ってこない事を意味する。(それを知ってしまった、年金原資の支払いに応じない人々が増えている。)

②. 子育ては社会的義務

と言う事は、子育てをする事は自分の年金を払って呉れる人を育てると言う事であり、その意味では、かつてと同じ事を、家族内の私事としてやるか、国家を経由する社会的行為として行うかという違いに他ならないはずである。

言い換えれば、いわゆるDINKsは、子育てという社会的投資責任を果たさないで、(子育てをする人々の投資の果実である)年金だけは受け取るという、構図が描けるのである。この様な意味から言えば、子育ては、私事としてではなく、社会的な責任であるとも言えよう。

但し、世の中には、様々な生活条件や生理的条件の中で、それをしたくても出来ない人々も少なくない。それはそれであろう。又、子どもを育てないと言う意味では、色々な考え方や価値観の中で、敢えて子育てを拒否する人もいるだろう。現代の人権の考え方からすれば、それも自由権的人権の一つである。

しかし、とすれば、少なくともこの辺りの経済的不平等の問題だけはなんとか解決しておかないと、子育てをする人々は、子育ての楽しみと言うだけでは、補い得ない不利を被る事になるのではなかろうか。

③『社会的子育て観』

さて、その様な意味で、現代の子育ては、社会的行為である。この様な子育て観は、同時に、子どもを親の私物としてではなく、社会的存在として捉える事になる。とすれば、子ども達は一人の社会的存在としての人権を主張するのは当然の事であろう。

この様な考え方をここでは『社会的わが子観』と呼んでおく事にする。

言い換えれば、子どもは、子どもとして直接社会の中で一個の人格を有する存在であって、そのため子どもは親の意向を超えて必要な社会的保護を得られるとともに、社会に対しての一定の義務を負うと言う考え方、と言えよう。この考え方は、子育てについても親の責任と同時に社会自体にも責任があるとする。(子どもの人権保障や、義務教育が無償であるとかいう考え方などの、根底をなす考え方)

(4). 子育ての社会的責任と保育所

この様に、子育て観は単に保育場面から出てくるものではなく、様々な日本の社会全体の価値観の中から出てくる、価値意識であろう。

現実には、この様な子育て観は、後述の様に大変混乱した中にあって、明確に皆の意識がそろっているわけではない。個人の意識の中ですら、明確に整理できているわけではない場

合が多いのである。

このような矛盾の最も象徴的な現れ方をするのが、保育所であると言えよう。その意味で保育所での対応は、非常に微妙な舵取りをせまられていると言えるし、社会的な理解と支援を得られない限り、日々このような大変なケースへの対応を際限なく迫られ続けているという事を確認しておく必要がある。

いずれにせよ、保育所の現実の保育の中では様々な困難な問題を突きつけられてきているのだが、それぞれの子どもは豊かな可能性を内包しているし、その子どもの将来を大切にする観点から、適切な対応をすれば、解決する事のそう難しい課題ではないケースも多い。しかし、そのためには、保育所の現状をそのままにしておくのではなく、様々な意味での改革や、その改革への社会的な支援施策を必要としているのである。

2. 極端に走る『子育て』と、その解決に向けて

(1). 『ペット的子育て』 —— 『委託加工的子育て』 ——

現在の子育てニーズの特徴は、以上の様な傾向を踏まえて、結局混迷の時期にあると言う事が出来よう。それは、結局、『私物的わが子観』から『社会的わが子観』への移行過程にある現在から、将来の方向がどちらに流れるのかと言う事になろう。

現在の兆候としては、私物的わが子観の極端な行き過ぎとしては、まるでわが子を着せ替え人形の玩具を扱うかペットでも育てる様な恣意的な飼育をしている『ペット的子育て観』も散見される。一方、『社会的わが子観』の行き過ぎは、育児について全く保育園などに任せきりの『委託加工的子育て観』も散見される。

意識としてのこのような子育て観は、単に意識としての問題以上に、子育て世代が社会で置かれている環境を反映したものである事に注目する必要がある。長時間労働、長時間通勤の現実の中では、『委託加工的』にならざるを得ない現実にも注目する必要がある。又、現実の職場の中では、仕事の対象に合わせて労働するのは当然の事であるから、社会が複雑になればなるほど、保育時間も一定の枠に嵌められない現実も発生している。そして、その様な委託加工的子育てに対する一種の罪悪感を払拭するために、ペット的に盲愛し甘やかす極端な行動に走る傾向もないわけではなからう。

(2). 保育・子育て理念確立の必要性

その様に考える時、このような様々な子育て観の混乱は、従来の「子育ては家族の責任」（私物的わが子観）と言う世間の常識と、「世代としての社会的責任としての子育て（社会的わが子観）」と言う現実との、ギャップが未整理のまま放置されているからだと言う事を、先ず確認する必要がある。そしてその整理をしておく事が、新たな保育所像を考える一つの出発点

である事を確認する事が必要であると考え。勿論、子育てが家庭を離れてあり得ない。家庭生活が精神的に豊かになるためにも、子育ては大変大切なものである。それらを踏まえつつ、今は、子育ては親や家庭だけの責任ではなく、世代としての社会的責任においての子育てと言う『社会的子育て観』を明確にする事が必要であろう。

言い換えれば、子育ては個々の人間としての当然の営みであると同時に、人類としての協同の課題である事を確認し、個々の人間の営みである子育てに対する人類としての支援を明確にしていく事が必要なのである。それは、人々の日常生活の中での何気ない助け合いから始まり、その様な観点を明確にした政策体系の確立と、その実践の最も中心である保育所における保育実践として結実している事が必要である。その様な実践に安心して委ねられると多くの人が考えた時、子育て世代は安心して子どもを設ける事になるのであろう。

但し、特に一人一人の子どもの成長にとって、肉親、特に両親の精神的サポートが非常に重大である事を繰り返し強調しておく事は大切な事であろう。

その様な前提にあって、その中心的機関たりうる可能性を持つのは保育所しかないのだから、保育所サイドからもきちんと社会の意識の変革を迫ると同時に、保育所も又、そのニーズに的確に対応していく事が必要とされる。

V. 保育・子育て理念の確立の必要性 ——教育から支援へ、発想の転換を——

1. 子育て世代が当面している課題

(1). 子育て世代が当面している経済的課題

現在の子育て中の家庭は、以上の様な言わば精神的課題とともに、経済的課題、そして新生活を始めつつある地域での生活上の課題も、背負っている。

経済的負担について言えば、現在の子育ては少数を育てるという事もあり、社会全体としての豊かさの反映と言う事もあり、現在の子育ては非常にお金のかかるものとなっている。従って、第一子はともかく、第二子・第三子になるとその負担に耐えきれない世帯が多くなっている。(家計費に占める教育費の割合は、年々上昇を続けている)

そして、その様に苦勞して子育てをしても、前項でふれた様に、かつての様にその子どもが親の老後を保障するわけではなくなっている。

その様な意味で、子育て支援制度全体の問題としても、又、保育所に関しても、子育て世代の保育経費負担を適正な額に押さえて行くことが必要であろう。又、当然の事ながら不十分な児童手当で制度の拡充についても、社会的に主張して行くべきであろう。

(2). 地域の子育て支援システムの崩壊

子育てについて最近の問題点の一つは地域社会が全体として幼い子への子育てについて暖かな眼差しで支援する体制になっていないことである。

特に、大都市部の男性社会ではその傾向が顕著である。通勤電車の中での妊婦の苦労はよく新聞投書等にも見られるし、現在の過密な且つ長時間の労働体制は、妊婦を支援する体制になっているとはとても言えない。又、産休や育児休暇の取得も大分進んできてはいるが、一般の企業に於ける実施状況はまだまだである。

一方、隣近所に親しい人のいない、又、親戚や両親とも遠く離れて暮らす若い人々にとっては、幼い乳幼児の育児を支援してくれたり、お互いにグチをこぼしあう様な仲間もいない。このような地域社会のあり様は、ただでさえ初体験で大変な思いをしている若い世代の育児に対する負担感をますます重いものにしてしまうと云えよう。

このような全体的な傾向に対して、地域社会全体としてもっと幼い子への配慮が必要であると同時に子育て中の若い世代への近隣社会での相互支援のシステムを工夫することが必要であると言える。

2. 子育ての楽しみこそ

——子育て意識変化の展望と、子育て理念確立の必要性——

(1). 近未来の家庭、子育て意識

①. ほっておけば、低下する出生率

若い世代にとっての、自己の実現と子育ての夢の矛盾は、経済的条件ともあいまって、このまま放置すれば益々悪い方向への循環に陥っていく可能性が高い。そして、結果は、若年人口の減少に歯止めが掛からないと言うことに成り兼ねない。若年人口の動向については、今後数年、第二次ベビーブーマー世代が親になる時期にどのような傾向を示すか、定かではない。が、しかし、第二次ベビーブームの時の様に、第三次ベビーブームが来ると考えている人は殆どいない。その背景には、その前の世代よりも精神的体力的知的に未発達な彼ら（第二次ベビーブーマー）はその前の世代よりももっと、上記の様な子育てを巡る経済的精神的負担を、強く自覚してしまっている事に一つの原因があらう。又、この世代は先に触れた様な背景のもとに、夫婦の関係や親子の関係という色々な人間関係を新たに作っていく努力を放棄する傾向があるという事であらう。

②. 自覚的な子育ての持つ積極的意義

しかし、この層は高学歴化している傾向があり、その事は自覚的な子育てをしたがるので、少産傾向を示すと同時に、社会的責任を自覚した子育て世代でもある点にも注目する必要がある。しかし、ここで問題なのは、そういう子育てをする夫婦の年齢層が上昇しつつある（㊥出産の増大など）ため、自らの老後への蓄積や、老親の介護への負担の時期と非常に近

づいてしまって、子育て世代の年齢層があがる事による経済的負担の軽減効果が殆どない事であり、また、彼らは社会の最も中枢の世代として、大変忙しい日常を送っている中での子育てになると言う事であろう。

③. 人間としての実力養成の必要性

一方、このような傾向とは裏腹に、高学歴化がその実質を保障していない傾向も顕著である側面も現れて（日本語の文章の読み書きがきちんと出来ない大学生や高校生などざらにいると言う現実）きており、その層には一部に無自覚な出産や子育てが増えてきている事も現実的な課題であろう。このような傾向の行き着く先は、現在の米国における様な家庭の崩壊や低年齢出産（20才未満の）の増大傾向となっていく可能性も指摘しておく必要があろう。この層は現在までの米国からの報道や社会福祉援助の経験則に照らせば、適切な支援を得られないままであれば、世代を越えてくりかえされていく可能性が強く、緊急に対応を迫られている問題である。

④. 日本国の枠を超えて

又、近年、大都市部から中小都市にいたるまで、都市部においては外国人労働者の子弟が増えている現実も保育の課題として無視出来なくなっていると言えよう。その対応についていろいろな見解があるにせよ、日本の経済的条件がかれらの出身国より良い限り、彼らの入国は増大の一途をたどるであろうし、一方、日本人の高齢化現象が止まらなるとすれば、その労働力需給の隙間をうめていく存在として、彼らの存在が貴重になる時代を予測せざるを得ないとすれば、彼らが日本に馴染み、日本に生きる人としての基本的な生活習慣を身につける様に援助する事は、日本の将来の安定にたいする大きな投資であるとも言えよう。

このような子育ての二極分解の傾向や外国人保育の難しさなどの問題が兆候として現れつつあるにも関わらず、保育所は現在その対応に明確な方向を確立しえないでいる。

〔注〕

本稿は、全国保育協議会によって、1992年10月から開かれた、『新しい時代の保育のあり方に関する検討委員会』の討議資料として筆者が報告した草稿に、手を加え、再構成したものである。手を加える過程で、同委員会の諸委員の先生方の意見を、参考にして修正した部分もあるので、付け加えて謝意を表したい。

1993年2月・松本短期大学研究紀要発表

A Study of Needs for a Day Nursery

— Needs from Young Family —